

「絵本」出現の一背景

—『絵本宝鑑』の著者橘宗重の出自の解明を通して—

市川 廣太

発表の趣旨をまず要約すれば次の二点になる。第一に、『絵本宝鑑』は近世初期軍記本『大友興廢記』の著者杉谷宗重の作であったことを解明する。第二に、『絵本宝鑑』の内容に、いかにも戦国武将の末裔ならでの伝承的な語り口のあることを明らかにする。

『絵本宝鑑』は、貞享5年(1688)に大坂の貫器堂重之より刊行された。内容としては主に中国故事よりなる195種の画題を取り上げ、それぞれに挿絵と解説を付した絵本である。この書が「絵本」という名を冠した現存最初の出版物であることは浅野秀剛氏の指摘する通りである。刊記によれば、著者として橘宗重、校訂者に藤貞漢、絵師に長谷川等雲の名が挙げられている。問題は著者の「橘宗重」であるが、その著者自身の序文に、彼はかつて豊後にいたが、ゆえあって伊勢の津に移ったと出てくる。校訂者の藤貞漢は、その橘宗重の残した書付をもとに、絵師長谷川等雲の協力を仰いで本書を編纂したのであったことが、こちらは貞漢の序文からわかる。そこで一方の『大友興廢記』であるが、ほかならぬ豊後の戦国大名、大友氏の興亡を大友義鎮、義統の二代を中心に追った軍記物語である。しかしながら同書は江戸時代を通じて公刊されることなく、昭和初期になってはじめて活字化された。長らく一般には知られることのなかった書物であるが、その『興廢記』の著者として「杉谷某宗重」の名が寛永12年の自序に記されているのである。

杉谷氏とは、大友氏に従った佐伯氏代々の家人であり、大友氏滅亡後は藤堂氏に仕えた佐伯氏に従い津に移り住んでいたことも調査によって明らかにすることができた(藤堂藩史料)。それだけではなく、『大友興廢記』そのものが、彼の津に在住していたその時期の著述であることもわかる。ある夜のこと、歳のころ80あまりになる同郷の老人が、宗重の父親を訪ねてきた。その折りに、往時を偲んで二人の交わした対話をもとに、宗重が書き記したものだだったのである。宗重自身は、晩年には豊後に帰住していたことがさきの藤堂家史料によって明らかであるが、寛永12年の時点ではまだ津におり、40歳代から60歳代の年齢であったことが推定される。名前といい年代といい、豊後から伊勢への移動といい、すべて『絵本宝鑑』の作者橘宗重の事蹟と矛盾なく重なり合うといえよう。

以上のことを知り得た上で、あらためて『絵本宝鑑』の内容を検討して気づかされるのは、取り上げた中国故事のどれもが、戦国武将らが好んで話題にした『太平記』のなかの話柄と一致することである。そしてそれは事実、『大友興廢記』のなかにも繰り返し現れてくる。宗重はそれを「画図の品」と読んだ。現代語とは異なり、「品」とは「典型」であり、教訓とするにふさわしい「話の種」である。やがてこの「品」の語が和漢の画題を問わず、続く絵本作者、西川祐信らのキーワードとなることをも発表では問題にする。